

# 「意味のある作業」に着眼した 新型コロナウイルス感染症流行下での精神科作業療法の役割

寺前 綾<sup>1)</sup> 下川 幸蔵<sup>2)</sup> 高橋 幸代<sup>1)</sup> 末政 佑梨子<sup>1)</sup> 小俣 直人<sup>3)</sup>

**要 旨**：新型コロナウイルス感染症の為に精神科病棟での活動が制限されている中、患者自身が考える「意味のある作業」とは何かを明らかにすることを目的に、福井病院入院中の対象者にアンケート調査を行った。対象者が考える「やりたい、したいと思っている作業」を挙げてもらい、それぞれの主観的な遂行度と満足度を定量化した。また、挙げられた作業を手工芸的技術的活動、身体的スポーツ的活動、社会的レクリエーション活動、日常生活活動、教育的文化的活動の5つに分類した。各分類における遂行度と満足度を比較し、さらに5分類間の遂行度と満足度を比較した。対象者が挙げたやりたい作業の中で、最も多かったのは社会的レクリエーション活動であった。各分類における遂行度と満足度に有意差はなかった。一方、5分類間の比較では社会的レクリエーションの遂行度や満足度は他の活動と比べて高くはなかった。「意味のある作業」に向けて、今後はまずは院内での社会的レクリエーション活動を増やしていく必要があると考えられる。

(福井医療科学雑誌 20:6-9, 2023)

**【Key words】** 意味のある作業, 精神科作業療法, 社会的レクリエーション活動, 新型コロナウイルス感染症

## 緒 言

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)は、日本国内では2020年1月に初めて感染が確認され、4年以上が経過した今もなおお束の見通しは立っていない。原<sup>1)</sup>によると、COVID-19は8割以上の日本人の生活に影響を及ぼしているが、具体的な影響として最も顕著なのは「外出」である。オンラインのインフラ整備などプラスの影響もあるが、人と人との接触を避けるための「行動の制限」に代表されるマイナスの影響の方が圧倒的に大きい。

我が国の精神科病院には、長期入院している患者も少なくなく、家族や友人などその他周囲の人々からの孤立を強く感じ続けてきた者も多い<sup>2)</sup>。このような背景のもと、COVID-19は精神科病院に入院している患者の孤立をさらに深めている。福井病院(以下、当院)では、感染予防対策として密集、密接、密閉の三密を避けるために病棟での自由な生活が縮小された。それにより、他患や職員とのコミュニケーションが減り、さらには面会、外出や

外泊、開放病棟での買い物や自由な散歩などが制限され、社会参加の機会が減った。

精神科作業療法の役割とは、患者の生活において、活動(生活上の具体的な行為)と参加(家庭内の役割、社会との関わりなど)に焦点を当て、その人らしい豊かな生活を継続するための基盤を作ること<sup>3)</sup>、患者の健康的な側面を発見し育み、自分自身の特性を振り返ることである。従って、どの作業をどの程度行うという量的な視点だけでなく、どのような「意味のある作業」を行うのかという質的な視点も重要である<sup>4)</sup>。精神科作業療法では、「自ら意思表示した」ことを実践していくことが、生活史の中にあり、新たな自分にもつながる「意味のある作業」となっていく<sup>5)</sup>。従って、自身が「やりたい、したいこと」を作業療法士とともに見つけることが「意味のある作業」へとつながると考えられる。作業を量的に見直すことが困難な精神科病棟の現状を鑑みると、「意味のある作業」の必要性が一層高まっていると考えられる。南による先行研究<sup>6)</sup>では、患者の意味のある作業を中心とした「健康的側

1) 福井病院 診療支援部 リハビリテーション課 作業療法室 作業療法士

2) 福井医療大学 保健医療学部 リハビリテーション学科 作業療法学専攻 作業療法士

3) 福井医療大学 保健医療学部 看護学科 医師

(採択日 2024年3月)

面」に着目してアプローチすることで、患者の自己効力感が向上し、より主体的な生活を送る姿勢が醸成されることが報告されている。

本研究は、当院入院中の患者自身が考える「意味のある作業」とは何かを明らかにすることを目的とした。本研究により患者の生活への満足度が回復したり、自分らしい社会生活への参加を目指していけるようになることが期待される。

## 研究対象と方法

対象は、当院入院中で本研究に同意が得られた長谷川式簡易知能評価スケール 21 点以上の患者とした。アンケートは、COVID-19 流行下の 2022 年 12 月に、調査に同意した対象者と筆者との対面式の面接により実施した。

まず、対象者が考える「やりたい、したいと思っている作業」を 1 人に対して 3 つ挙げてもらい、それぞれの作業の主観的な遂行度と満足度を Visual analogue scale (以下、VAS) を用いて定量化した。アンケート用紙に書かれている 10 cm のスケールの左端を「全くなし」、右端を「最大限に満足している」として患者自身が感じている遂行度や満足度の位置に印をつけてもらい、左端からの長さを測定値とした。次に、作業療法分野で広く使用されている日本版・高齢者興味チェックリスト<sup>7)</sup>の分類をもとに、聴取された作業を「手工芸的技術的活動」、「身体的スポーツ活動」、「社会的レクリエーション活動」、「日常生活活動的活動」、「教育的文化的活動」の 5 つに分類した。各分類における遂行度と満足度の VAS を、Willcoxon 符号付順位和検定を用い比較した。さらに、5 分類間の遂行度の VAS および満足度の VAS を Kruskal-Wallis 検定を用い比較し、有意差が認められた際には多重比較検定を行った。いずれの検定も有意水準は 5% とした。

## 倫理的配慮

対象者へは、アンケート調査を実施する際に、研究目的及び調査の趣旨、参加の自由意志と匿名性の遵守、データ保管方法を十分に説明したうえで、書面にて同意を得た。データは匿名化して結果との対応関係が特定できないように処理した。

また、本研究は、新田塚医療福祉センター倫理審査委員会の承認(新倫 2022-28)を得ている。

## 結 果

### 1. 対象者

アンケートに同意した 37 名(男性 21 名, 女性 16 名)に面談にて調査した。平均年齢は 65.9(標準偏差 13.0)歳であった。疾患内訳は、表 1 に示す。

表 1. 対象者の疾患内訳

疾患名	人数
統合失調症	22 名
うつ病	3 名
てんかん性精神病	2 名
アルコール依存症	2 名
解離性障害	2 名
レビー小体型認知症	1 名
器質性妄想性障害	1 名
アルコール性脳症	1 名
双極性障害	1 名
全般性不安障害	1 名
精神遅滞	1 名

### 2. やりたい作業の分類(図 1)

最も多かったのは「社会的レクリエーション的活動」であった。次いで「身体スポーツ的活動」「日常生活活動的活動」「手工芸的技術的活動」「教育文化的活動」の順となり、最も多かった「社会的レクリエーション活動」は、次に多かった「身体スポーツ的活動」の 3 倍以上だった。具体的に対象者が挙げた活動内容としては、「社会的レクリエーション活動」では飲食、カラオケなど、「身体スポーツ的活動」では外出、散歩など、「日常生活活動的活動」では買い物、料理など、「手工芸的技術的活動」では手芸、塗り絵など、「教育文化的活動」では脳トレ、読書などであった。

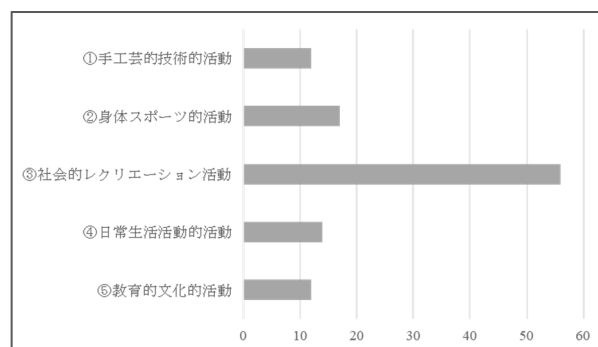


図 1. 対象者のやりたい作業の分類件数

表2. 各分類内と各分類間における遂行度と満足度の比較

	遂行度 中央値 (第1四分位数 - 第3四分位数)	満足度 中央値 (第1四分位数 - 第3四分位数)	分類内 遂行度と満足度 の比較	分類間 (遂行度)	分類間 (満足度)
分類1	4.6 (2.3-5.6)	6.2 (2.7-9.8)	n.s		
分類2	0 (0-0)	0 (0-0)	-		
分類3	0 (0-3.4)	0 (0-4.6)	n.s		
分類4	3.5 (0-5.1)	0 (0-5.4)	n.s		
分類5	0 (0-1)	0 (0-1.1)	-		

分類1：手工芸的技術的活動  
 分類2：身体スポーツ的活動  
 分類3：社会的レクリエーション活動  
 分類4：日常生活活動的活動  
 分類5：教育文化的活動

\*:  $p < 0.05$  \*\* :  $p < 0.01$   
 n.s : Not Significant

### 3. 各分類における遂行度と満足度の比較(表2)

いずれの分類においても遂行度と満足度の間に有意差は認められなかった。

### 4. 5つの分類間での遂行度の比較(表2)

分類間に有意な差が認められ、多重比較の結果、身体スポーツ的活動に比べ、手工芸的技術的活動が有意に高かった。

### 5. 5つの分類間での満足度の比較(表2)

分類間に有意な差が認められ、多重比較の結果、身体スポーツ的活動、社会的レクリエーション的活動、教育文化的活動に比べ、手工芸的技術的活動が有意に高かった。また、身体スポーツ的活動に比べ、日常生活活動的活動が有意に高かった。

## 考 察

本研究では、当院入院中の患者自身が考える「意味のある作業」とは何かを調査し、それを精神科作業療法のプログラムに反映させることを目的とした。その結果、対象者は一番やりたい作業として「社会的レクリエーション活動」を挙げたが、これに対する「遂行度」や「満足度」は他の活動と比べて高くなかった。

長期入院患者に対して精神科作業療法では、陰性症状の改善や生活空間の拡大、対人交流の促進といった治療目的でアプローチをしていく<sup>8)</sup>。このため当院では、感染が拡大するまでは、買い物などの外出を伴った活動やカラオケ大会、季節の行事などの集団活動を出来るだけ取り入れるようにしており、多くの患者がそれらを楽しみ

にしている様子も観察されていた。本研究において、やりたい作業として「社会的レクリエーション活動」が最多であったことは、当院で従来実施していた作業療法プログラムが、治療目的に合致した妥当な内容であったことを示唆していると思われる。

これに対して、上記の活動に対するアンケート施行時の遂行度、満足度ともに他の活動と比べて高くはなかったことは、COVID-19の拡大に伴い、「個人が主」となる活動が主体とならざるを得なかったことを端的に反映しているのかもしれない。感染拡大後、当院での作業療法では、入院中でも得られる日常的な生活体験<sup>9)</sup>として手芸や塗り絵などの「手工芸的技術的活動」や、脳トレなどの「教育文化的活動」を積極的に実施してきた。しかし、これらは患者が最もやりたいと思っている作業ではなく、患者が実感できる生活空間の拡大や対人交流の促進などにはあまり繋がっていない可能性がある。孤独や孤立が人間に及ぼす影響について、肥満や運動不足といったこと以上に健康に大きな悪影響を及ぼす<sup>10)</sup>とされている。このため、他患者と共に送っている院内生活であっても孤立感が強まり、ひいては心身共に健康維持が図れなくなっている危険性があることも懸念される。

2024年1月現在の当院の作業療法においてははまだ制限が残存しており、院外での活動再開は厳しい状況である。しかし2023年5月よりCOVID-19が5類感染症に移行された院内での活動においては、患者間の交流はある程度は許容されるようになってきた。そのため、まずは院内での作業療法において社会的レクリエーション活動を少しずつ増やしていきたいと考えている。

## 研究の限界点

本研究では、アンケート対象者の性差、入院形態や病棟形態、入院期間などの背景が及ぼした影響に関しては考慮していないため、カルテ等を通して追跡調査を行う必要性があると考えられる。

## 結 語

当院での精神科作業療法において、意味のある作業(患者がやりたい作業)は社会的レクリエーション活動であったが、その遂行度や満足度は高くなかった。今後は、まずは院内での社会的レクリエーション活動を増やしていく必要があると思われる。

## 謝 辞

本研究を進めるにあたり、アンケートにご協力いただいた患者様に対し、深く感謝いたします。また、多大なご指導、ご支援いただいた皆様にも深く感謝いたします。

## COI 申告

本研究に関連し、著者全員に開示すべき COI 状態にあたる企業、組織、団体はいずれもありません。

## 文 献

- 1) 原美和子. 新型コロナは私たちの暮らしや意識をどう変えたか. 放送研究と調査 2021 ; 6 : 2-30.
- 2) 藤野成美ほか. 精神科における長期入院患者の苦悩. 日本看護研究会雑誌 2007 ; 30(2) : 87-95.
- 3) 中村春樹. 作業療法のあり方と病院における作業療法の役割. 作業療法ジャーナル 2015;49(6) :464-471.
- 4) 吉川ひろみ. 作業って何だろう 作業科学入門. 第2版. 東京 : 医歯薬出版 ; 2017. 35-41.
- 5) 大松慶子. 意味のある作業とは-1995 年～2010 年における国内事例報告の質的検討. 日保学誌. 2015 ; 18(2) : 68-80.
- 6) 南庄一郎. 統合失調症の急性期作業療法において意味のある作業に着目することの有用性. 作業療法. 2019 ; 38(1) : 103-109.
- 7) 能登真一他. 標準作業療法学 専門分野 作業療法評価学. 東京 : 医学書院 ; 2017. 246-253
- 8) 龍海絵里, 金山昭代. 我が国における統合失調症患者を対象とした精神科作業療法に関する研究の動向 1997 年～2006 年の論文より. 四條畷学園大学リハビリテーション学部紀要. 2007 ; 3 11-19.
- 9) 田中浩二. 精神科長期入院患者の生活世界. 日本精神保健看護学会誌. 2010 ; 19(2)33-42
- 10) 岡本健佑, 于洋. 我が国における高齢者の孤独・孤立防止政策の課題と中国の示唆. The Journal of Business Administration (2022). 2022 ; 18(1) : 57-74.